

博士号請求論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 堀 内 ふ み 野

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授
文学研究科委員

井 上 逸 兵



副査 京都大学名誉教授
関西外国語大学外国語学部教授

山 梨 正 明



副査 米国・カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授

(Sandra A. Thompson)

論文題目

English Prepositions as an Interface between Embodied Cognition and
Dynamic Usage: Proposal of a Dynamic View of Grammar

(認知と使用の接点としての前置詞：動的文法研究に向けた提案)

論文要旨

本博士号請求論文は、文法的な構造が創発・定着する動機づけを「身体性」と「言語使用」の両面から解明することを目的としたものである。認知言語学では、身体を介した経験が概念化の基盤となり、それが言語の意味拡張をはじめとした創造的側面を動機づけていると考える (Lakoff 1987; Langacker 1987, 2008)。一方、認知言語学は使用基盤の考え方も重視し、語や構文に関する知識は使用文脈の情報を取り込みながら動的に構築されるという立場を取る

(Langacker 2000; Bybee 2006)。身体的経験に基づく概念化と、社会的な使用文脈の中で動的に形作られる慣習性は、どちらも認知言語学の理論的枠組みにおいて言語の構造を形成する重要な要素として考えられてきた。しかし両者は、普遍性と慣習性、さらには個人の身体と対人的なコミュニケーションといった、一見すると異なる性質を持つ。本論文では、こうした二面性の接点として英語の前置詞を位置づけ、その実例の分析を通して、一見すると相反する要因が文法的体系の創発を複合的に動機づけ、我々の言語知識の形成に貢献していることを示した。

本論文は以下のように構成されている。

1. Introduction

1.1 Background and Scope of this Study

1.2 Why Prepositions?

1.3 Outline of the Study

Part I

2. Theoretical Framework

2.1 Introduction

2.2 The Symbolic View of Language

2.3 Continuum of Lexicon and Grammar

2.4 The Cognitive and Embodied Basis of Language

2.5 The Usage-Based Approach

2.6 Summary

3. Previous Studies of English Preposition

3.1 Introduction

3.2 Classical Views of Linguistic Polysemy

3.3 Prototype Approach to Categorization

3.4 Cognitive Linguistics Approach to English Prepositions

3.5 Problems of Previous Studies and the Goals of this Research

3.6 Summary

Part II

4. Motivation for Selecting a Preposition from a Synonymous Pair: A Case Study of *Influence On* and *Influence Over*

4.1 Introduction

4.2 Previous Studies on Semantics of the Prepositions On and Over

4.3 Data and Methods

4.4 Results: Differences between *Influence On* and *Influence Over*

4.5 Discussion

4.6 Conclusion

5. *Under* phrases as Clause-level Modifiers: Comparison with *Over* and *Below* Phrases

5.1 Introduction

5.2 Background: Grammatical Behavior and Meanings of Prepositional Phrases

5.3 Data and Methods

- 5.4 Results of the Quantitative Research
- 5.5 Construal Reflected in Grammatical Status
- 5.6 Position in the Clause and Discourse Functions
- 5.7 Discussion: Motivation for the Grammatical Behavior of *Under* Phrases
- 5.8 Conclusion

6. Asymmetric Behavior between *Above* and *Below* in Formal Written Text

- 6.1 Introduction
- 6.2 Previous Studies of *Above* and *Below* for Discourse Reference
- 6.3 Data and Methods
- 6.4 Differences in Grammatical Behavior
- 6.5 Differences in Collocation
- 6.6 Theoretical Implications
- 6.7 Conclusion

7. Children's Use of Prepositions from the Perspective of Resonance

- 7.1 Introduction
- 7.2 Criteria of Determining the 'Central' Meaning of a Preposition
- 7.3 Dialogic Syntax
- 7.4 Data and Method
- 7.5 Results and Discussions
- 7.6 The Role of Resonance and Theoretical Implications
- 7.7 Conclusion

Part III

8. Discussion

- 8.1 Summary
- 8.2 How do Cognitive and Contextual Factors Interact with Each Other?
- 8.3 What are the Meanings of Individual Words?
- 8.4 Methodological/Descriptive Importance and Theoretical Implications

9. Concluding Remarks

- 9.1 Importance of a Dynamic View of Grammar
- 9.2 Future Issues

論文の概要

以下、本論文を構成する全9章の概要を述べる。

第1章では、上述のような本論文の問題意識を示した上で、「なぜ英語前置詞を研究対象にするか」を身体性、多義性、文脈依存性の観点から説明した。

第2章では、本研究の理論的枠組みとして、認知文法の言語観と用法基盤主義のアプローチについて説明した。その上で、認知言語学は理論的には用法基盤主義を掲げているものの、前置詞の意味に着目した実際の分析では必ずしも用法基盤的なアプローチが採られていない点を指摘した。

第3章では、認知言語学の枠組みで行われてきた前置詞研究に対し、批判的検討を行った。従来の前置詞研究で暗黙に想定されてきたのは、その意味が前置詞一語を単位として記述で

きること、つまりは個々の「語」が意味を担う単位であるということである。しかし、実際の言語使用に目を向けると、個々の前置詞はより大きな談話的文脈や発話連鎖の中に生起し、その背景にはコミュニケーションを行う主体である話し手・聞き手が存在する。用法基盤主義の立場に立脚するならば、前置詞に関する知識は生起文脈に関する情報と併せて蓄積され、その意味は「語」よりも大きな単位で認識されている可能性がある。しかし、先行研究では前置詞の意味が「語」の単位で分析され、動的な使用文脈と前置詞の意味との関わりは詳細には論じられてこなかった。本章では、具体例を提示しながら先行研究の問題点を述べ、語と生起文脈との関係を重視した「動的文法研究」の必要性を示した。

第4章から第7章では、四つの事例研究を通して、前置詞の振る舞いが普遍的な認知プロセスと多様な文脈的要因の双方から動機づけられていることをコーパス調査から定量的に示した。最初の事例研究である第4章では、影響関係を表す類義的な表現 *influence on* と *influence over* の比較を行った。コーパスを用いて両者の用法を比較し、「影響を与えるもの」の有生性によって二つの表現が使い分けられていることを指摘した。それを基に、(i) 両者の使い分けの一部は *on* と *over* の空間義の特性に動機づけられていること、(ii) 両者の間には、生起しやすい文法的パターンや、構成要素である *on/over* の意味には帰せない相違もあることを論じた。この分析から、言語使用者は構成要素の意味だけでなく各表現が含まれるより大きな構文に関する知識も有しており、それに基づいて類義的な表現を使い分けている可能性を示した。

第5章では、前置詞 *under* を主要部とした句 (*under* 句) の文法的特性を、反義的な *over* 句や類義的な *below* 句との比較を通して明らかにした。まず、コーパス調査の結果から、(i) これらのうち *under* 句だけが文副詞的に用いられ主節前に生起する傾向にあること、(ii) その場合に *under* 句は事態が起こる条件を表すことを示した (e.g., *Under such circumstances*, the influence of the father would be absent.)。メタファー理論に基づく従来の前置詞研究では、その空間義の特性が抽象義に反映されていると考えられてきた。しかし、文副詞的に生起する傾向は *under* 句が空間義を表すときには見られないことから、その傾向は空間義の特性に基づいて生じたというよりも、*under* が条件を表す意味に拡張したことで初めて生じた、条件義に特有の文法的特性であると考えられる。本章では、*under* 句が *if* 節と類似した意味機能を担っていることを指摘し、*if* 節からの類推によって *under* 句にも文副詞として主節前に生起する用法が発達・定着した可能性があることを論じた。

第6章では、*above/below* の談話指示用法 (e.g., as mentioned above, see below) を比較し、一見すると対称的意味を表す両者に非対称的な振る舞いが見られることを指摘した。例えば、両者は生起しやすい文法的パターンや、共起する名詞・動詞のタイプが異なる。これを基に、本章では、*above/below* に非対称性が生じる動機づけを談話（特に学術論文など格式張ったテキスト）の構造から考察した。具体的には、談話における先行文脈と後続文脈は読み手・書き手にとって異なる意味を有しており、書き手がその相違に配慮しながらテキストを構成することで、*above/below* の間に非対称性が生じていることを提案した。この事例から、書き言葉の構造、読み手・書き手間のコミュニケーションの性質、ジャンルの特性といった文脈的要因によって、前置詞の振る舞いが形作られることを示した。

第7章では、子どもによる前置詞の使用の特性を Du Bois (2001, 2014) の対話統語論

(dialogic syntax) の枠組みで分析した。親子の会話における発話連鎖に着目し、子どもによる前置詞の産出の仕方が月齢に応じてどう変化するかを辿ることで、前置詞および前置詞を含む構文の習得過程を探った。発話の連鎖関係を見る上では、先行発話とあらゆる面で類似した発話を後続話者が行う「響鳴」(resonance)に着目し、響鳴が起こる頻度やその範囲を月齢ごとに観察した。それを通して、(i) 子どもは先行発話への響鳴を介して前置詞を使い始めるが月齢が進むにつれて徐々に響鳴による産出の割合が低下すること、(ii) 月齢が進むにつれて響鳴の範囲が拡大していくこと、(iii) その拡大には親からの響鳴が重要な役割を担うことなどを明らかにした。この結果は、子供が隣接する発話の性質といった局所的文脈に依存して前置詞を習得していることを示唆する。それと同時に、本章では、子供はコミュニケーション上の機能に依存して前置詞を習得する傾向にあることを論じ、インタラクションの観点を取り入れた文法研究の有効性を示した。

第8章では、以上の事例研究を踏まえて、各前置詞に特定の用法や構文が結びつき、それが定着化していく動機づけを考察した。本章では特に、次の二点を主張した。第一に、各前置詞の用法は普遍的な認知能力に動機づけられるだけでなく、実例が生起する局所的文脈の特性に応じて動的に形作られる。第二に、言語使用者の前置詞に関する知識は、一語よりも大きな単位で構築・アクセスされる。すなわち、前置詞に関する知識は、それが頻繁に生起する構文や具体的な文脈に埋め込まれた形で構造化されている。さらに、言語使用者は、使用上の文脈をトリガーにしてその知識にアクセスし、前置詞を産出しているのではないかと考えられる。

第9章では、まとめと今後の展望を述べた。以上で見てきたとおり、従来の前置詞研究では意味拡張の認知的基盤に焦点が当てられ、その意味分析は前置詞一語を単位として行われてきた。それに対して本論文は、前置詞の振る舞いが認知的要因だけではなく動的な使用文脈やコミュニケーションの目的といった文脈的要因に動機づけられていることを示し、使用の中で揺らぎながら前置詞を含む文法的構造が形成されていくプロセスを示した。「語」は必ずしも意味を伝達する基本的単位ではなく、前置詞をはじめとした「語」の意味とは、その語のあらゆる用法を抽象化したスキーマとして単一的に記述できるものではない。その意味はむしろ、コミュニケーションの場における具体的な使用事例に基づき、局所的な生起文脈の情報と共に蓄積・アクセスされるものである。今後は、前置詞以外にも研究対象を広げつつ、より多様な文脈的要素(例:視線などの非言語的要素、話し手・聞き手の対人関係)を考察することで、生起文脈の特性を文法的構造が創発する中心的基盤として位置づける「動的な文法研究」をさらに発展させることが可能になるであろう。

審査要旨

本論文は、英語の前置詞を事例とし、文法的構造が創発・定着する動機づけを認知言語学の枠組みから分析したものである。認知言語学では前置詞の意味に関する分析が多数行われてきたが、その多くは意味拡張の動機づけを身体性の観点から分析したものであった。これらの多くは、個々の「語」が意味を担う単位であるという暗黙の想定のもと、前置詞一語を単位とした意味記述が行われてきた。換言すると、従来の研究は文脈から切り離された前置

詞それ自体の意味を分析するに留まり、「実際の言語使用の中から話者の前置詞に関する知識がどのように立ち現れ、構造化されていくか」という使用文脈との関わりについては分析が行われてこなかった。それに対して本論文は、多様な文脈にある言語使用に焦点を当てつつ、コーパス基盤のデータに基づいた数量的サポートを加えながら、文脈的要因が文法的構造の創発・定着を動機づけていることを示したものである。

本論文は、特に次の点で独創性が認められる。

まず、記述面における独創性は、生起文脈との関係を捉えた形で各前置詞の特性を記述した点である。用法基盤主義の考え方では、語に関する知識は実際の使用事例から生起文脈の情報を含む形で記憶・蓄積されると考えられている。これに基づき、本論文では、コーパスから実例を採取し、各前置詞の生起環境（共起語、生起する統語構造、生起位置）の傾向を定量的に示した。それによって、各前置詞の特性をそれが含まれる「構文」の観点から明らかにし、使用の場からボトムアップ的に形成される言語知識の実態を探った。これは、実際の使用を考慮することなく前置詞一語単位の意味を分析してきた従来の研究と、大きく異なる点である。さらに、親子の会話における発話の連鎖関係を観察し、「響鳴率」という独自の指標を用いて記述することで、隣接した発話間の関係性とその月齢に応じた変化を示した。談話の構造や発話の連鎖関係は定量化が難しいとされてきたが、本論文はこれらを定量的に示している点に独自性が認められる。

さらに本論文は、各前置詞がなぜ特定の生起環境で頻繁に生起し、共起する要素とともに構文を形成するに至ったかを、談話の構造やコミュニケーション上の機能の観点から考察している。従来の前置詞研究の多くは、意味拡張を動機づける認知的要因、および語が持つ意味的特性を、意味論の範囲でのみ分析してきた。一方、本論文では、言語使用の目的、話し手/聞き手の認知的制約、談話構成上の方略などが前置詞の振る舞いを動機づけ、その定着化を促す重要な基盤になると論じている。この想定のもと、本論文は、意味論の範囲に留まらず、発話の場や話し手/聞き手の関係性といった文脈的要因を考慮し、使用の場から文法構造が形作られていくプロセスを説明していることも特筆に値するであろう。

さらに、こうした文脈重視の視点を取ることで、本論文は、一つの前置詞が文脈に応じて多様な振る舞いをするという使用上の「ばらつき」にも妥当性の高い説明を与えている。従来の研究は、各前置詞に結びついた意味間の共通性に着目し、それらが関連していることを多義ネットワークの形で示してきた。しかし、実例を観察すると、一つの前置詞であっても特定のジャンルで用いられるときは特定の意味に偏って生起するなど、生起環境（e.g. ジャンル、前後の文や発話との関係）に応じて前置詞が表す意味や生起する文法構造は異なる場合が多い。例えば、*above* と *below* は、空間的意味を表す際は反義的な前置詞として対称的に使われるが、学術論文のジャンルでは談話指示用法の副詞辞として頻繁に生起し、かつ、非対称的に用いられる。本論文は、生起文脈に応じた用法の「ばらつき」に着目し、それが生じる要因を生起環境の特性に基づいて説明している。コミュニケーションが起こる環境や目的は多様であり、それを反映する形で前置詞も多様な構文と結びつき、話者の知識として定着していると考えられる。本論文のアプローチは、この点において、言語使用の中でゆらぎながらボトムアップ的に構築される文法知識の在り方を捉えているところも評価に値する。

それに加えて、本論文の大きな貢献は、前置詞に関する話者の言語知識が「語」よりも大

きな単位で構築・アクセスされることを示した点である。上述のとおり、これまでの前置詞研究の多くは前置詞一語を意味の記述・分析の単位としてきた。しかし、実例を見ると、各前置詞の共起語や生起する統語構造の傾向は慣習的に決まっている面も大きく、前置詞の用法は、文脈との関係性を含めて記憶されていると考えられる。言語使用者は、こうした「語」よりも大きな単位の言語知識にアクセスし、前置詞の産出や意味理解を行っていると考えられる。これは、使用文脈との関わりを重視した分析を通して初めて明らかになったものであり、語の意味研究に対して、生起文脈との関係性こそが語の意味および語に関する言語知識を決定づけるという、新たな分析の視点を提供するものと高く評価できる。

さらに、本研究は認知言語学や語の意味研究だけでなく、他の関連分野の研究にも貢献しうるものだろう。上述のとおり、本論文は、認知的観点から多くの研究がされてきた「前置詞」を分析対象としつつも、意味論の範囲を超え、談話やコミュニケーション上の機能を重視した説明を行っている。本論文は、談話・機能言語学や相互行為言語学の知見も取り入れて認知言語学の研究を発展させる、一つの具体的な方法を示していると言えるだろう。同時に、本論文の成果は、談話・機能言語学や相互行為言語学といった関連分野の知見を認知言語学的研究に取り込む有効性を実証している。例えば本論文では、談話・機能主義の流れをくむ「対話統語論」の枠組みを用いた事例研究を行い、当該の枠組みが前置詞のような機能語の研究やその習得研究にも広く有用であることを示した。本論文は、複数の言語理論や研究分野の知見を横断的に取り入れていることで、それらの間をつないで双方向的な発展を促すものとなっている。

また、本論文は、コーパス言語学の研究にも貢献する。コーパス言語学の枠組みでは、表層的な生起分布に着目した量的分析が多く行われている。一方、本論文では、表層的な形式のみならず前置詞が表す意味にも踏み込んだコーディングを行うことで、形式と意味の対応関係を明らかにし、話者が有する構文的知識の在り方を探っている。これによって、前置詞の空間義と非空間義では生起しやすい文法構造が異なることを明らかにし、メタファー理論の不備を示すなど、理論的にも重要な指摘を行っている。本論文の成果は、コーパスを用いた言語研究に対して、形式だけではなく意味の観点からもデータを分析する有効性を示している。これはつまり、コーパス言語学の知見が認知言語学の研究にも応用可能であり、認知言語学の理論的発展を促すものにもなりうることを示している。

最後に、本論文は、言語習得の研究にも重要な知見を提供しうる。これまでもコーパスに基づく習得研究は行われてきたが、それらの多くは、特定の月齢における発話長の平均値や語の生起頻度の合計を示すのみであり、具体的な発話の連鎖関係を詳細には分析していない。それに対し、本論文における親子会話の分析は、発話の連鎖関係に注目することで、直前の発話が子供の産出に与える影響や、直後の発話が習得にもたらす効果を指摘した。この成果は、従来想定されていた以上に、コミュニケーションが起こる個別的・局所的な文脈が言語習得にとって重要な役割を担うことを示唆するものである。子供の言語習得における親の発話の影響は従来から指摘されてきたが、その分析においても、「どのタイミングでどの発話がなされたか」という具体的な発話の連鎖関係を重視する必要性を示していると言えるだろう。

全体として優れた論文であるものの、細部についてはいくつか問題点もある。まず第一

に、堀内氏が「動的 (dynamic) 」と呼ぶところの概念は、議論を通じて明らかにはなっているが、理論的な規定が必ずしも十分ではない。文脈に依存した言語使用、会話のやりとりを意味しているのか、あるいは言語がつねに変化を想定すべき動態であることを意味しているかが不明瞭な部分がある。これを明確にすることにより、特に相互行為言語学への貢献がより大きなものとなるだろう。

また、堀内氏が、OEDなどの記述を元に、basic、original、primaryな意味を想定、そこからの意味拡張を論じているが、これらの「基本的、一義的」意味は自明のものではなく、それ自体議論すべきであったように思う。現在のところ、これについての学術的な同意は世界的にもなされていない。さらに言えば、この「拡張」の概念も関係を意味するのかプロセスを意味するのかについての議論も多少必要であったように思う。

これは今後期待すべき問題の大きさが、上と平行する問題だと考えられることとして、等しく言語話者が生み出した作例と文脈に根ざしたデータとの関わりの議論に踏み込むことができるならば、言語研究におけるデータの取り扱いについて、より根本的な問いかけが可能になるだろう。作例的なデータを排除し、コーパス基盤の実際の言語使用をデータとしたことの意味が強調されているが、その意味こそが今後問われるべきだろう。

以上のような問題がありながらも、本論文は、言語の構造、意味、運用に関わるメカニズムの解明に大きく貢献するものであり、今後の言語学および関連分野のさらなる発展につながるものと評価できる。審査員一同は、本論文が博士 (文学) の学位授与にふさわしいと判断する。